

第4章 五十嵐力におけるインベンション指導

本章では、我が国の中等作文教育に大きな影響を与えた五十嵐力を取り上げる。五十嵐は、国文学や修辞学の研究者として名高いが、同時に作文指導の実践者であり、数多くの作文教科書を著した指導者でもあった。この事実に着目して、その作文教育の理論と実践において、発想・着想・構想指導がいかに関与していたかを明らかにしたい。

第1節 五十嵐力の略歴と業績

五十嵐の略歴と修辞学関係の業績*1は、以下の通りである。

1874（明治7）年、山形県に生まれる。

1892（明治25）年、米沢中学校卒業後、東京専門学校（早稲田大学の前身）文学科入学。

1895（明治28）年、同専門学校卒業。翌年、『早稲田文学』の記者となる。

1901（明治34）年、東京専門学校に嘱任され、文章学を担当。「爾来文章理論の確立と学生の作文の添削指導に粉骨砕身の超人的辛苦を嘗めたるが、作文の教授に従事せしこと十七年の中、二三年は受持ちの学生千余人に及びたり」*2という状態であった。

1905（明治38）年、『文章講話』（早稲田大学出版部）刊行。

1906（明治39）年、「通俗修辞」（『文章世界』）を連載。

1909（明治42）年、『新文章講話』（早稲田大学出版部）刊行。『作文応用・常識修辞学』（文泉堂書房・服部書店）刊行。

1910（明治43）年、『実習新作文』（早稲田大学出版部）刊行。

1911（明治44）年、「吾人は如何なる文章を学ぶ可きか」（『文章世界』）を発表。

1913（大正2）年、『作文三十三講』（早稲田大学出版部）刊行。

1916（大正5）年、『高等女子新作文』全4冊（大日本図書）刊行。『縮刷新文章講話』（早稲田大学出版部）刊行。

1917（大正6）年、『中等新作文』全5冊（至文堂）刊行。

1919（大正8）年、『実業新作文』全3冊（修文館）刊行。

1920（大正9）年、『訂正中等新作文』全5冊（至文堂）刊行。

1923（大正12）年、『修辞学大要』（斯文書院）刊行。

1924（大正13）年、早稲田大学文学部長。『修辞学講話』（講義録）執筆。

1925（大正14）年、『国歌の胎生及び発達』により文学博士となる。

1928（昭和3）年、『国語の愛護』（早稲田大学出版部）刊行。

1929（昭和4）年、文部省臨時国語調査会委員。（以降、1944年まで国語審議会委員。）

1935（昭和10）年、『修辞学綱要』（啓文社、『修辞学大要』改題）刊行。

1945（昭和20）年、停年退職。1947年（昭和22）、逝去。享年74歳。

この他、国文学研究の主な著書としては、『平家物語の新研究』（春秋社、1923）、『軍記物語研究』（早稲田大学出版部、1931）、『平安朝文学史』（東京堂、1937）、『昭和完訳源氏物語』（菁柿堂、1948）などがある。また、『八重むぐら』（敬文堂、1917）、『我執転々記』（東苑書房、1936）などの随筆集を数多く刊行し、文筆家としても著名であった。

さらに、国語教育に関しては、『純正国語読本』（早稲田大学出版部、1929）、『純正女子国語読本』（早稲田大学出版部、1933）を編集し、旧制中学校や高等女学校の読本として広く

読まれた。五十嵐の国語教育界への影響力の強さは、次の事例からも窺える。

- ①『文章講話』が、『新文章講話』『縮刷新文章講話』と増補改訂*3されたこと。
- ②芦田恵之助*4が、「頭括式・尾括式・双括式」などの修辞学用語を用いていること。
- ③垣内松三*5が、「言語の活力」の例として、五十嵐の随筆「牛」*6を引用していること。
- ④丸山林平*7が、「表現態度の指導」（着想・構想・記述・推敲の指導）を考案するにあたって、『新文章講話』を援用していること。
- ⑤五十嵐の文章が、玉井幸助編『女子新作文・実用文篇』（三省堂、1937）など、数多くの作文教科書に模範例として採用されていること。
- ⑥五十嵐編纂の作文教科書『高等女子新作文』、『中等新作文』、『実業新作文』が、多くの中等学校で採択*8され、「教授用参考書」*9も発行されていたこと。
- ⑦『新文章講話』は、今もなお、波多野完治『最近の文章心理学』（大日本図書、1965）、久松潜一『日本文学評論史／理念・表現論篇』（至文堂、1969）、斎藤美奈子『文章読本さん江』（筑摩書房、2002）などによって、高く評価されていること。
- ⑧現代の高等学校教科書においても、「頭括式・尾括式・双括式」などの修辞学用語が用いられていること。

この他、芳賀矢一・杉谷代水『作文講話及び文範』（富山房、1928）や谷崎潤一郎『文章読本』（中央公論社、1934）にも影響を与えており、「五十嵐の各種作文教科書に与えた教育的な影響の大きさは、おそらく空前絶後のもの」*10である。

第2節 五十嵐の修辞学及び作文教育に関する先行研究

五十嵐力の修辞学の意義について最も詳しく考察しているのは、文献①原子朗『修辞学の史的研究』（早稲田大学出版部、1994）である。原は、『新文章講話』の内容についてつぶさに検討し、「日本の修辞学の一大到達点を示す集大成」であると評価している。つまり、「『新文章講話』は単なる文章形式や文章修飾法を説いた本ではなく、形式すなわち内容、つまり形想一如の思想に立つものであること、そして表現理論がそのまま読者によるテキスト受容理論にもなっているところに五十嵐修辞学の一大特色がある」というのである。特に第三編「文章組織論」及び第四編「文章精神論」に着目し、「内容」と「形式」の一如を重視した「文章価値論」であったと位置づけている。

作文教育における五十嵐の業績について考察した文献では、文献②野地潤家「中等作文教科書の考察—大正期旧制高等女学校の場合—」（1977）*11及び文献③「旧制中学校の作文教育—五十嵐力博士の場合—」（1978）*12が挙げられる。

文献②では、『高等女子新作文』の総目次と序文とを紹介し、本書を「雅文から口語文への過渡期に、高等女学校生徒の文章表現力の実態に即しつつ、具体的に多くのくふうを凝らして編まれた内容の豊かな作文教科書である」と評価して、当時の代表的な作文教科書であったと位置づけている。

文献③では、五十嵐の旧制中学校時代の作文学習体験から、東京専門学校における文章学担当当時の心情と文章学研究の実績、『作文三十三講』に見られる記述過程に関する苦心談、作文教科書『中等新作文』の内容と特色、及び作文学習指導への新方案などに至るまで、五十嵐の作文教育の全貌を見渡せるように整理したうえで、五十嵐の文章表現についての助言は「いか

にも周到であり、適切で、中枢・根幹がよくおさえられている」と高く評価している。

この他の研究論文としては、文献④勝又昌義「明治末における構想論(1)五十嵐力「文章組織の五形式」」（『東京学芸大学紀要』第18集・第19集、1967・1968）、文献⑤尾島健次「五十嵐力博士著『新文章講話』」（『平安朝文学研究』第3巻6号、1974）、文献⑥増淵勝一「五十嵐力博士の『実習新作文』」（『平安朝文学研究』第3巻第6号、1974）、文献⑦浅田孝紀「五十嵐力の修辞学理論に関する考察—作文指導のための再編と精選—」（『人文科教育研究』第16号、1989）、文献⑧同「作文教育史における五十嵐力の位置」（『人文科教育研究』第18号、1991）、文献⑨同「五十嵐力における作文指導の実際」（『教育学研究集録』第15集、筑波大学教育学研究科、1991）がある。

文献④では、「文章組織」の五形式（追歩・散叙・頭括・尾括・双括）は初学者の実際の手引きとして作られたものであり、現代の作文指導における構想の類型にも適用できると評価している。

文献⑤では、『新文章講話』における西洋修辞学の影響について詳細に検討したうえで、五十嵐はその内容を完全に消化し、日本文の例を積極的に取り入れた優れた修辞学書であると評価している。

文献⑥では、『実習新作文』において、「まづ未熟なる文を挙げ、そのいかがわしき点を説明して削正たる結果を示し、次ぎに一通り立派にできた作を挙げ、次ぎに模範文を掲ぐる」という「グレード式」と「添削説明」の新方式が編み出されたことを指摘している。

文献⑦では、五十嵐の修辞理論において、「文章基礎論」（正確でわかりやすい文章に関する論）、「文章組織論」（文章全体の構成に関する論）が生涯一貫していたのに対し、「文章修飾論」は、『新文章講話』成立と前後して大きく変容していったことを指摘し、それは「一般や学校教育の作文指導に生かすための「再編」であり「精選」であった」と結論づけている。

文献⑧では、五十嵐の作文指導の方法論の特徴を、「刺激的批評を加えること」「よい書物を読ませること」「実用重視」「自由題による作文の提唱」の四点に整理するとともに、作文教育史上、大正期後期の「生活の表現」の先駆的役割を果たしたと位置づけている。

文献⑨では、五十嵐の作文指導においては、「文章基礎論」「文章組織論」の問題が「文章修飾論」の問題よりも重視されているという仮説に基づき、『実習新作文』及び『高等女子新作文』『中等新作文』から、書翰文及び准書翰文、記事文、論文の添削例を一～二例ずつ取り上げて検証し、「その内容から見れば、「達意」と「思想」の作文指導であった」と結論づけている。

こうした先行研究によって、『新文章講話』『実習新作文』『作文三十三講』を中心とする修辞学理論の特徴と作文指導観は、ほぼ明らかになってきたと言えるだろう。ただ、書き手の「思想」を明確にさせるためにいかなる指導を行ったのかという点は、未だ十分に解明されているとは言い難い。五十嵐が、「書くべき内容」を発見させ、「形想一如」を実現させるために、どのような工夫を行ったのか。その内実を解明することが課題として残っているのである。

そこで、本稿では、五十嵐が最初に編纂した作文教科書『高等女子新作文』を考察対象として取り上げ、その指導内容について検討することとする。

第3節 『高等女子新作文』の特色

『高等女子新作文』（全四巻）は、「高等女学校、女子師範学校及び実科女学校などの作文

教科書として、同時に小学校卒業以上のあらゆる日本婦人の文章稽古の参考書」として編纂されたものである。「序」によれば、著述を思い立ったのは1912年春だという。生徒作文の蒐集に満二年の歳月をかけ、1916（大正5）年3月、大日本図書から刊行された。さらに、同年5月には四巻をまとめた合本が発行された。頁数は、巻一＝157頁、巻二＝160頁、巻三＝170頁、巻四＝208頁である。

1 序文に見る同書の特徴

『高等女子新作文』の序文には、同書の特徴として、次の七点が挙げられている。（括弧内は、引用者による補足である。）

- (1) 今日の若き女子の真情を書き表はした新らしき文章を基本材料としたる事。
- (2) まづ悪文を掲げて、その悪しき所以、及び添削改竄の方法を示し、次ぎに無難の文、及び名文を掲げたる事。
- (3) 黒朱二度刷の方式によって悪文添削の結果を一目の下に瞭然たらしめ、直接に師に就きて批正を乞ひたると同様の結果を得させんとしたる事。（この方式は、『高等女子新作文』で初めて採用され、『中等新作文』『実業新作文』にも引き継がれた。）
- (4) 常識的に咀嚼消化されたる作文上の教訓を処々に挿入し、前後の文例と連絡照応せしめて、容易に面白く作文上の注意と呼吸とを会得せしめんとしたる事。同時に、挿入の文

つゝ

話の間に自然に連絡統一あらしめて、文章の根本要義を悉さしめんとしたる事。

- (5) 時代の大勢に鑑み、口語文主位、雅文従位の方針にて全篇を一貫したる事。
- (6) 各種の文章に対するそれぞれの特別注意を懇ろに示したる事。
- (7) 活きた趣味のある文章を沢山掲げた事。

序文には、さらに次のような断り書きが記されている。

著者は作文教授に最も必要な事は、「生徒をして書きたいといふ気分にならせる事」謂はゆる「気乗りさせる事」であると思ひます。而して気乗りさせるに最も有効な方法は、一つの事物題目に関する沢山の睨みどころを示して、「かういふ所を取つて来て、かういふ風に書けば、かういふ面白い文章が出来るぞ」といふ実例を示すことであると思ひます。本書の豊富なる類題列挙は此の考へによつて試みたもので、従つて此の部分は生徒の自由に読み去るに任せて下さつて差支ありません。著者が教授者の方々に願ふところは、唯だ文話と、悪文添削の一章と、佳作の中御気に召した一篇と、是だけを説明して下さることです。（同書9頁。傍点は原文のまま。以下同じ。）

この「書きたいといふ気分にならせる事」が最も必要なことだという指摘は、五十嵐の実践者としての実感に基づいたものである。五十嵐は、豊富な実例と類題を列挙することによって、「睨みどころ」（着眼点）と書き方を教示しようとしたのである。ここに、彼の作文指導の最も基本的な姿勢を見ることができる。

2 各巻の内容

各巻の内容は、次のようになっている。文種別*13に再整理して示す。（単元名のあとの丸数字は、収録作文数。*印は、文種指定の緩やかなもの。△印は候文や雅文を含む単元。）

《巻一》（全26単元）

○文話（4単元）

第1 文章のいろは／第5 手紙の文に関する二大注意／第8 記事文に関する二大注意

／第26 四つの「多」

○書翰文 (9単元)

第3 入学後の模様を知らずる文△③／第4 母に代はりて商人へ△⑨／第9 報知の手紙△⑩／第12 時候見舞△⑧／第14 風水害の見舞△⑤／第17 慰問袋にそへて△③
／第20 年賀状△⑦／第22 病氣見舞②／第25 誘引と招待△③

○記事文 (13単元)

第2 小学校時代の思出③／第6 悲しみと喜び(日記)③／第7 わが好む花③
／第10 起きてから登校まで△③／第11 日曜日記△②／第13 夏休みの四十日⑥
／第15 秋になりて△④／第16 お婆さんに聞いた話③／第18 ポチの死②
／第19 悲しき思出△③／第21 新年日記△③／第23 家庭に起こった事②
／第24 冬より春へ△④

○論説文 (0単元)

《巻二》 (全27単元)

○文話 (7単元)

第1 雅文体と口語体／第5 文字の使ひ方上／第6 文字の使ひ方下
／第13 手紙の書式其の一、文章の構成／第14 手紙の書式其の二、附属の形式
／第19 手紙の種類／第27 嗜み

○書翰文 (8単元)

第4 依頼の手紙△⑥／第11 悔みの手紙△④／第12 いろいろの手紙△③
／第17 旅の親に宿許の様子を知らずる手紙△④／第18 手伝を頼む手紙△⑦
／第21 かるた会に友を招く△⑦／第24 問合と依頼△⑧／第26 出席常なき友へ①

○記事文 (10単元)

第2 新学年の始まるまで△③／第3 学校②／第7 幼時の思出③／第8 春景色△②
／第9 遠足△④／第10 箒と蛙②／第15 夏片々△⑤／第16 朝の五分間と飛行機△②
／第20 十二月△⑤／第22 擬人物語△③

○論説文 (2単元)

第23 わが家の歴史△②／第25 海苔はどうして出来るか①

《巻三》 (全26単元)

○文話 (9単元)

第1 自分を現はせ／第3 論文式と感想文式／第8 修辞大要 上／第九 修辞大要 中
／第十 修辞大要 下／第17 感想文、抒情文／第十九 他の風(短文批評)
／第25 文章の種類、上／第26 文章の種類、下

○書翰文 (3単元)

第4 物を贈る手紙△⑧／第7 見舞の手紙△③／第14 旅より△⑦

○記事文 (10単元)

第5 仕立物と張物*△③／第6 興の浮ぶまゝに△⑦／第11 夏の朝と昼と夕*△③
／第13 我が故郷△③／第15 名物△②／第16 落葉と落日②／第18 俗説をそのまゝ④
／第20 冬②／第21 女子の見たる大隈伯①／第23 途上所観△④

○論説文 (4単元)

第2 女としての我が希望△③／第12 水と活版△②／第22 汚点抜きと味噌の造り方△②

／第24 二つの徳②

《巻四》（全29単元）

○文話（7単元）

第1 文章の穏当／第6 叙事文について／第11 文章修飾の三原則、一
／第12 文章修飾の三原則、二／第21 文章組織の段取一／第22 文章組織の段取二
／第29 総収

○書翰文（5単元）

第3 先生に送る手紙△⑦／第7 昔気質の年寄に孫娘を女学校に入るゝ事を勧む△②
／第19 東京から田舎へ*②／第24 海の外より△②／第26 卒業後恩師へ△②

○記事文（9単元）

第5 恥と死②／第9 都会と田舎*△③／第10 樹*②／第13 盲啞学校の参観△②
／第15 国産奨励展覧会を見る②／第17 島と鳥*②／第18 卒業旅行△⑤
／第20 年の暮れから年の始めへ②／第27 お名残のバザー①

○論説文（8単元）

第2 家庭論△②／第4 作法のいろいろ③／第8 三月の節句と五月の節句*②
／第14 九月十三日△①／第16 料理*△②／第23 女学生小説閲読の可否△②
／第25 趣味*②／第28 人生の最大幸福△②

3 教材構成の特徴

以上の単元構成及び文例の分類表（表1・表2参照）に基づき、本書の特徴は次のように整理することができる。

第一、「文話」及び「文例と評言」によって、修辞学の基本が具体的に解説されていく。

第二、低学年においては、書翰文と記事文（表2）の教材提示方法別文例数、わが書翰文では目的や手が明確に指定されていること。

第三、学年進行につれ、説明文や議論文が重視される。口語と文語、口語と文語を精選する課題も増えていること。

第四、書翰文では候文も数多く見られるが、基本的には口語文重視の姿勢を貫いていること。

第五、提示される悪文例の大半は、候文・雅文（文語体）であり、記事文、論説文においては、口語体の良文を数多く紹介していること。

第六、題材は、学校生活、季節の変化、実生活上の必要性などを考慮し、真情の書き表しやすい内容を取り上げていること。

総じて、生徒の発達段階に配慮しながら、実例に即して、文章作成上の注意を平易に学ばせようとした画期的な教科書であったと言える。それまでの作文教科書は、文章作法を講述するか、もしくは大家の模範文例を並べるものが多かった。それに対して、本教科書は、数多くの生徒作品を取り上げており、さらに、確かな修辞学理論に裏打ちされた評言を加えることによって、親しみやすく理解しやすい教科書となったのである。

《表1》巻別・文種別文例数

| | 書翰 | 記事 | 論説 | 計 |
|----|-----|-----|----|-----|
| 巻一 | 51 | 41 | 0 | 92 |
| 巻二 | 40 | 30 | 4 | 74 |
| 巻三 | 19 | 28 | 14 | 61 |
| 巻四 | 12 | 23 | 32 | 67 |
| 小計 | 122 | 122 | 48 | 272 |

| | 悪文例 | | 添削例 | | | | 良文例 | | 計 |
|-----|-----------|----|-----|-----|------------|---|-----|----|-----|
| | 口語 | 雅 | 悪文 | ほぼ良 | 口語 | 雅 | | | |
| 書翰文 | 3 | 17 | 0 | 9 | 0 | 1 | 53 | 42 | 125 |
| 記事文 | 4 | 3 | 8 | 6 | 14 | 6 | 72 | 10 | 122 |
| 論説文 | 1 | 1 | 1 | 5 | 5 | 2 | 14 | 3 | 32 |
| 小計 | 口語17/雅文41 | | | | 口語158/雅文64 | | | | 279 |

第4節 五十嵐力の発想・着想・構想指導

では五十嵐は、「書くべき内容の発見」と「想の組織化」に関して、いかなる注意を与えようとしたのであろうか。

1 五十嵐の作文指導についての「方案」

五十嵐は、『作文三十三講』¹⁴において、「我れ若し小学校、中学校の作文教師たらば」と題して、「教へる場合に試みやうと思ふ新方案」として、次の六点を挙げている。

- ①「彼等自身の心から湧き出でた題材に就いて書かせる」こと。
- ②「細かに観察して細かに書く稽古をさせ」ること。
- ③「細かに書く中に要点を浮かし出す事を稽古させ」ること。
- ④「スケッチ書きの稽古、即ち味はひのある要処だけを取り離して、それを細かく書く工夫をさせ」ること。
- ⑤「組織段取の事をざつと教へ」ること。
- ⑥「常に実用を忘れぬやうにする」こと。

この六つの方案には、課題の設定、取材・選材、描写、構成法など、作文指導で取り上げるべき問題がほぼ全て網羅されている。この卓見が、『高等女子新作文』に生かされたのである。その具体的事例を見てみよう。

2 「文題」による発想・着想指導

五十嵐は、浅田（文献⑧）も指摘しているように、基本的には、自由題で書くことを理想とした。しかし、教室の実際的な場面では、何の指導もなく「自身の心から湧き出でた題材」が自発的に生まれるとは考えられない。刺激的な「文題」や「文話」や「評言」があつてこそ、生徒の心の中に「書くべき内容」が浮かび上がってくるのである。五十嵐も、そのことは承知していたはずである。その事例の数々を、『高等女子新作文』の「文題」に見ることができる。

(1) 日常生活に即した文題

第一に挙げられるのは、日常生活に即した文題である。例えば、巻一の入門期は、「小学校時代の思出」「入学後の模様を知らする文」「悲しみと喜び」「わが好む花」「起きてから登校まで」「ポチの死」「家庭に起こった事」というように、家庭や学校など身の回りに起った出来事や季節の変化に取材するものばかりである。文種も記事文と手紙に限定されている。現代人から見れば平凡な話題であると思われるかもしれないが、名文の模倣を強要される時代の生徒にとっては、新鮮なものと感じられたに違いない。こういうテーマならば、話題が見つからなくて困るということがない。むしろ、日常のありふれた素材でも作文の材料になるのだという発見をもたらしたことと思われる。

その端的な例は、巻二第10「箒と蛙」や同第16「朝の五分間と飛行機」に見ることができる。これは、箒と蛙を組み合わせて文章を書けというのではない。「芥溜の箒」や「蛙の声」のようなもの、「朝の五分間」のようなわずかな時間にも、「趣味の目」を開いておけば、「平凡に興味を見出す呼吸を会得することが出来る」ということの実例として挙げているのである。このように、文題とあわせて、各単元に取り上げられた作品例の一つ一つが、発想・着想のヒントとして示されているのである。

(2) 想像によって書く文題

第二に挙げられるのは、想像力を駆使して書く「虚構の作文」である。例えば、巻二では「擬人物語」を課している。動物、植物、無生物などを擬人化して、その動植物などの立場から物事を観察してみようという課題である。読本で学ぶ「十銭銀貨の来歴話」や夏目漱石「吾輩は猫である」によって関心を持たせた上で、「我は言問の鶇である」（悪文例と良文例）と「ピース（犬の名）」（良文例）と題する三編を紹介している。更に、類題として、「我れは高雄山の紅葉なり」「△△園の石の述懐」「動物園の象になって」「破れ団扇の身の上話」「黒板

拭の一生」などを挙げている。

このように他者の視点に立って述べるということは、生徒たちにとって珍しい経験であり、楽しんで書いたことと思われる。文章を書くことに対する負担感が軽減され、のびのびと自己表現ができるようになるだけでなく、他者の目から自己を見つめ直すことにもなるのである。現代では「リライト作文」「翻作表現」「書き換え作文」などと呼ばれている指導法の非常に早い時期での事例である。

(3) 論点の明確化を導く文題

第三に挙げられるのは、論説文の文題である。論説文のテーマは一般に、「家庭論」や「都会と田舎」のように単語だけで示されることが多い。しかし、これでは捉えどころがないから、そこに一工夫を加える必要が生じる。その工夫の一つが、巻四第23「女学生小説読書の可否」である。当時はまだ、「女が小説などを読むとろくな者にならない」と言われていた。そのような風潮に対して自分の意見を述べてみようという課題である。これならば、賛否両論が出てくるし、客観的な説明文や議論文をあまり好まない生徒であっても切実な問題として受けとめられたはずである。しかも問い方が「可否」となっており、立論の立てやすい形となっている。小説は文学の中でどんな地位を占めるものか。どんな種類があるか。どのような感化力があるかなど、調べることもつながる課題である。論理的な文章を書く練習として恰好の文題であった。

また、巻二第25「海苔はどうして出来るか」のように、問いかけ型の文題もある。「無味乾燥なことをはっきりと正しく書きあらはす」練習であるが、問いが明確なので、焦点がぶれにくい。類題には「御飯の炊き方」「味噌の摺り方」「寿司、お萩の作り方」「鯉節の製法」「養蚕の手続き」「茄子、南瓜の作り方」「家の出来上がる順序」が挙げられている。

3 「書く場」の条件設定

生徒に課題を与えて書かせる際に、十分に配慮しなければならないのが「場の設定」である。「書きたいという気分にならせる」には、題材に興味を持たせるだけでなく、相手や目的を明確にして、書くことに必然性を持たせなければならない。そのことを主張しているのが、五十嵐の「六何の説」である。

「六何」と言えば、一般には、新聞記事の「5W1H」、すなわち、ニュース原稿を書く時に基本となる六要素（when? where? who? what? why? how?）が想起される。この「5W1H」は、歴史的には、ローマ帝政期の弁論家・教育家であったクインティリアヌスが提唱した¹⁵と言われている。彼は、法廷弁論における質問の観点として「何故? どこで? いつ? どのように? どのような手段で?」の5項目を挙げたのである。

だが、五十嵐の「六何の説」は、これとは異なるものである。『文章講話』「緒論」¹⁶には、次のように説明されている。

特に文章を作る者の、毎に必ず注意すべき事柄が六つある。之を「六何」といふ。「六何」とは、何故に? 何事を? 何人が? 何処にて? 何時? 何如に? の都合六つ、其の各々に何の字が付く所から、仮に之を名づけて「六何」といふのである。

改めて言ふには及ばぬことであるが、文章は²³当目なく書くものではない、必ず何故に書くかといふ目的が無ければならず、而して其の目的の異なるに従つて書き様も自然違つて来ねばならぬ。(中略) 第二には何事を書くかといふこと。(中略) 第三には何人が何人に向つて書くかといふこと。(中略) 第四は何処にて書くかといふこと。(中略)

）第五は何時書くかといふこと。（中略）最後の要件は如何様に書くかといふこと。約めていへば、何故に、何人が、誰に対かひ、何時、何処にて、如何なる事を如何様に言ふか又言ふべきかといふ。是れ文章を作る者の、何人も最初に考へ定むべき事柄である。

つまり、文章を書く際には、「どういう目的で（目的意識）」「誰が（立場意識）」「誰に向かって（相手意識）」「いつ、どこで（場面意識）」「どのようなことを（主題意識）」「どのような方法で述べるか（方法意識）」ということについて、よく考えよというのである。このように、書くという行為を「相手に伝える実用的・社会的行為」として捉え、「場」の条件を意識して「想」の形成を図るべきだと考えたところに、五十嵐の独創性がある。

この「場の設定」が明確に示されるのは、書翰文の指導である。本書では、巻一第3「入学後の模様を知らずる文」、同14「風水害の見舞」、巻二第21「かるた会に友を招く」など、日常生活に即したものが多く、「場の設定」に無理がない。

しかしそれだけならば、特段のものとは言えない。五十嵐の工夫が窺えるのは、例えば巻四第7「昔気質の年寄に孫娘を女学校に入るゝ事を勧む」のように、ひとひねりした課題を設定したものである。ここでは、「首尾よく小学校を卒業した娘があつて、すぐ高等女学校に入りたいと思ふが、昔気質のお祖母さんの反対で、無事に入れさうもないといふ場合に、其のお祖母さんを説き勧めて、娘の志を遂げさせてやらう」と指示している。この場合、相手が高齢の方であるから、言葉遣いに注意しなければならない。また、議論を売るといような喧嘩腰の手紙を書くわけにもいかない。「向うの自尊心は毫末も傷つけずに、孫娘の行末を案ずる温情に訴ふ」文章を書くことが求められるのである。

巻二第26「出席の常なき友へ」及びその類題として示された「試験に卑怯なる行為ありし友へ」「兄の不養生を諫む」などの忠告の手紙も、真剣に考えることを余儀なくされる課題である。五十嵐が「忠告は、向こうの心に同情して裏から説き諭す方が妙である」と助言しているように、相手をよく理解し、適切な言葉を選ぶことが求められるのである。

さらに、「場の設定」を活用した課題例に、巻四第3「先生に送る手紙」がある。この単元に挙げられた例文「赤茄子の作り方を知らず」の書き出しは次のようになっている。「御尋ねのトマトの作り方につき、父に尋ねまして、大要をお知らせ申し上げます。」この書き出しを参考にして手紙を書くことにすれば、その問われた内容についてよく調べ、順序立てて説明する学習が、自然な形で成立することになる。同題材は、『中等新作文』巻五第六課「物を問はれし返事」でも使用されている。さらに『中等新作文』には、類題として、「自分の中学の学風を尋ねられたに答へる手紙」「書物の疑義を尋ねられたに答へる手紙」「草木花卉の植え方、育て方、品物の造り方、小動物の養ひ方」などが挙げられている。

このような「実用・実務一方の無趣味な機械的な文章」には、関心の持てない生徒も少なくないが、書翰文形式を用いることで、相手意識を明確にさせ、調べることにも必然性を持たせることが出来るのである。「場の設定」を活用した「想の形成」の事例である。

4 「観察の重視」と「中心思想の発見」

本教科書の「文話」は、「文章に関する通理」を解説するために設けられたものであるが、ここでも、「発想・着想」に関する助言が頻繁に登場する。その中でも最も強調されているのは、「観察の重視」と「中心思想の発見」である。

巻一の巻末単元（第26単元）では、巻一で学んだことを三点にまとめている。すなわち、第一「自分の真実思っていることを、人に解るやうに、人の心持を悪くせぬやうに書くのが作文

道のいろはである」こと、第二「手紙の文に要する事は、用向の早わかりすること、相手に快く受けられるやうに書くことの二つ」だということ、第三「記事文に特に要する事は、細かに観察して、目貫の要点を委しくしつかりと浮かして書く」ことである。この整理を踏まえて、「観察」の重要性について、次のように述べている。

吾々は古人の文章を読むと共に、身の周囲の活きた事実を観察せねばならぬ、而して自分のほんとに興味を感じた所をそのまま書き表はすやうに工夫せねばならぬ。若し梅の花を見て、その堅々とした花の、枝にひつ着いて咲いてゐる所が寒さうだと考へて、そこに興味を感じたならば、それをそのまま書いて見るがよい。日曜に掃除洗濯と大働きをしてお母さまに褒められたのが嬉しかった、その日のお八つは今までに覚えぬ美味しさであつたと感じたならば、それをそのまま書き表はすがよい。坂道に悩む子僧の車を推してやつて気持ちよく感じたならば、それをそのまま書くがよい。途中で人の羽織に糸屑のついて居るのを注意して愉快に感じたならば、それを其のまゝ現はすがよい。鶏の世話、犬の世話をして、それに興味を感じたならば、それをそのまま書くがよい。目を拭つて見さへすれば、吾々の目の前、足の下に、面白い、書く価値のあることが、無数に転がつて居るものである。吾々は書物を見、古人の文章を見てその良悪優劣を考へると共に、常に此の目の前の自然人事を細かに観察して、之れを忠実に書きあらはす工夫をせねばならぬ。是れが自分の文章を活かす第一の道であり、同時に自ら活きる有効なる道である。(傍点は原文のまま)

このことは、各単元に収められた生徒作文例に即して、重ねて強調されている。例えば、巻一第13「夏休みの四十日」では、生徒作品例六編を紹介し、次のように解説している。

すべて文章は大きい、えらい事を書くから面白くなるといふものではない。どんな小さい、つまらなさうな事でも、目を明いて見れば、それぞれ一簾の意味を持つてゐるので、それをつかんで一所懸命に書けば、必ず生命のある文章の出来るものである。否、広い大きい事を好い加減に写すよりは、狭い特別の点を丁寧にしんみりと写す方が、遙かに活きた文章を得る所以である。「東京見物記」とか「大正博覧会を見る」とかいふ広い題は、精しく書くには限りがなく、書いて活かすのは尚更容易の事でない。初学の人の中に写すべきは、斯様な面積の広いものよりも、却つて吾々の目の前足の下に転がつて居る小さい事実である。論より証拠、砂上の足痕、夕刊の一銭、朝顔の花に宿つた露の如きでさへも、味はひ尽くせず、書きつくせぬ趣味があるではありませんか。

このように五十嵐は、身の回りをよく観察し、焦点化して書くように求めた。そこに、五十嵐の発想・着想に関する基本的な姿勢が現れている。

5 「目分量式」の構想指導

では、このようにして見出された「中心思想」は、いかにして組織化され、文章化されていくのであろうか。

「構想」に関する五十嵐の指導内容が最も明確に示されているのは、巻四第22「文章組織論」である。ここでは、発想・着想から記述・推敲までの文章作成過程⁴⁷が、「目分量式の組織法」の具体例として、次のように丁寧に解説されている。以下、抜き書きする。(番号及び傍線は引用者による。)

①与へられた題目もなく、予定の目論見もない場合に、偶然、こんな事を書いて見ようかと思ひつく事もある。或は与へられた題目について、興味を中心になる思想を、ふつと思ひつ

く事もある。(略) かういふ感想が、多くの場合我が文章の種子となり中心となるもので、 斯様な場合には、忘れぬやうに成るべく之れを書き留めるやうにする。

②中心になるべき思想が見つかり、今度は成るべく之れを培養して肥やし育て、行く事を考へる。で、書物も其の心構で読み、談話の折にも、景色を見る折にも、その心構で注意して居るやうにすると、その中心思想の味方になりさうな材料が思ひがけぬ所からポツポツと集まつて来るものである。それをも成るべく逃がさずに書き留めておく。

③その集まつて来る材料の中には、自分の趣意を立てるに都合のよいのもあり、又自分の意見に反対したのもあつて、それらの敵味方いろいろの材料が、頻りに頭の中でせり合ひ戦ひ合ふ中に、いつとなく自分の考が段々に熟して来る。熟する中に大体の見当がついて向うに光が見えて来る。「ウム、かう書き出して、かう並べて、かう止めれば、大概物になるな。」といふ荒木取りの形が見えて来る。此の光、此の形の見えて来るのを合図に、材料を整理して、筆を執るがよい。

④筆を執る前には、まづ極大体、始めにこんなことを書いて、それからこんな事を書きつゞけて、大概こんな処で結尾にしようといふ位の見当を定めて、それから、かねて集めて置いたごたごたの材料を、始めの方に入用な分、中程で入用な分、終はりの方で入用な分と位に、三つ四つに分ける。

⑤いよいよ筆を執る時には、頭の調子をよくし、思想の流出工合を滑らかにするために、気に合つた古今の名文を読むのもよい。或は自分の今まで書いたものの中で、比較的心に合つたものを口馴らしに読むのもよい。それから前の材料や参考の書物などを机のまはりにおいて、心を集注して段々と書き出すのである。

⑥始めの部分は一寸^{きま}極り難いものであるが、もし気に合はなければ五度も六度も書きかへるがよい。その中どうやら最初の六七行乃至半枚一枚が曲りなりに極ると、丁度運動会で幅飛をする者が、遥か向うから駆けて来ては、弾みをつけて飛ぶやうに、已に書いた部分を幾度も読みかへしつゞ、調子をつけては、次ぎの文句へ、次ぎの文句へと移つて行くのである。此の移り工合、滑り進む調子は、どうか蚕の糸を吐くやうに、水の低きにつくやうに、自然に無理でなく運ぶやうにしたいものである。

⑦かうして前の文句に継ぎ足し継ぎ足しして進んで行く間に、前に集めておいた材料をポツポツと嵌め込んで行くのであるが、数多き材料の中には、終はりまで、使用されずに残つてゐるのが出来るであらう。さういふ場合には、それをば思ひ切つて捨てるがよい。

⑧かうしてまづいながらに一つの文章が纏まつて筆をおいた時には何とも云はれぬ快感を覚える。この場合には是非一服とし、一遊び遊んで、気を抜いて頭をさましてから、読み直して手入れをするのである。

以上を要約すると、「まづ中心思想をつかむ、材料を集める、熟するのを待つて、材料を大体区分して、一所に気を集注して書く」ということになる。つまり、文章組織法については、「三段落か、四段落か」といったわざとらしい形式にこだわらず、「如何やうに書き始めて、如何様に言ひつゞけて、如何様に締め括りをつけるかといふ大体の見当を定めて、熟した活きた感想を頭から無理なく手繰り出すやうにする」こと、また「書き終はつて後に無駄を省き穴を塞いで磨きをかける」ことさえやれば十分だと説いたのである。

樂觀的すぎるのではないかとさえ感じられる説明ぶりであるが、「目分量式」に大体の見当をつけることさえすれば、後は頭の動きや筆の運びに任せればよいというところに、五十嵐の

「形想一如」の考え方がよく表れていると言えるであろう。

6 「添削・評言」における着眼点の指導

本教科書において重要な位置を占めているのが、「添削と評言」である。五十嵐は、小学校時代に、^{ぼん}坂蘭溪、^{かみちら}上村節山という二人の師から与えられた「圏点と批評」に作文心を強く刺戟された¹⁸が、その体験を踏まえて、実際の文章表現指導においても添削に力を入れていた。その添削内容にどのような特徴が窺えるか。記事文（日記）の事例を取り上げよう。（五十嵐が添削した箇所を、取消線と傍線とで示す。傍線部が朱字で書き加えられた部分である。）

〈作文事例〉「謹慎の一日」（巻一第6）

四月十一日 土曜 晴

五時半に起きた。寝衣のまゝで庭をのぞいて見ると、此の間まで元気のよかつた瓢箪木もつるし燈籠も淋しさうに枯れて、松をたよりにからんでゐる鳶と一緒に、何をか考へて深く思ひに沈んで居るやうに見える。外では電車の音もがかすかに淋しさうに聞こえる。私は皇太后陛下の御事を考へつゝしほしほとして学校に行つた。学校の門には喪章をつけた大きな国旗が立てられ、いつも騒がしい運動場も、何となくおだやしづかであつた。やがて生徒一同屋内体操場に集まらめられて、校長先生からのお話があつたが、皇太后陛下がおかくれ遊ばした事や、陛下の御生前御仁徳の御高かつた事などを伺つた時には、思はず胸がふさがつた。校長先生のお話もが済んでからむと、今度は名々の教室へ行つて、受持の先生から皇太后陛下のお偉かつた事又今日はしづかにして慎んで居なければならぬ事などを伺つた。先生の前のテーブルの上には、昨日理科の説明に使はれた菜の花が、小さい瓶に活けてあつたが、皇太后陛下の御後を慕つて行くやうにはらはらと散つた。家に帰ってから、お母さんと一緒に新聞を読んだが、読むうちに悲しさがこみ上げて来て、涙が頬をつたはつた。新聞もを読みをはつてから、猫にも喪章をつけてやつた。猫はおとなしくつけさせた。私は猫でも、こんなにつゝしんであるのかと思へてふと、一層悲しみを感じ、くなつて、一日立派につゝしんでゐた。（完）

*

〔評言〕あどけない情の素直に現はれた面白い文である。草木が枯れたり、菜の花が散つたり、猫に喪章をつけてやつたりしたところも、無理なく加へられて、皇太后陛下を哀悼し奉る中心の情を引き立てゝ居る。続け具合などに一寸々々と穏やかでない所も見えるが、概して整った作である。

*

〔文話〕皇太后陛下奉悼式当日の日記を書くならば、其の日にも不断の通りいろいろの事があるであらう。自分の身について見ても、朝起きてから、床を上げて、顔を洗つて、髪を結つて、「御早う」をして、食べて、飲んで、履物をはいて、学校へ行つて、帰つて、眠りにつくまで細かに挙ぐれば限りがない。自分以外にも、同じやうに、電車も動いて居り、人も騒いで居り、木草は風にそよいで居り、鳥は木の間に囀つて居るであらう。しかしながら是等は、今写さうとする事に深い関係のあることではない。然らば吾々の写すべき眼目は何であらうか、どういふ事物がその眼目に深い関係があるであらうかと、斯う考へて、朝起きてから夜休むまでの事、家の内外で見たり聞いたりした事を繰り返して細かに観察して見るのである。而して観察して見た結果、崩御について世の中のしづかに謹慎して居る様子と、国母を悼み奉る自分のしめつた心持とを写すのが眼目のねらひ所である、

そして之れを表はすに力のあるのは、昨日まで榮えてゐた庭の草木の淋しく枯れた有様、喪章をつけた国旗、校長先生の御遺徳追懐談、菜の花の風なきに散る風情、猫にも喪章をつけてやつた事などである。と、かう極つたならば、寝たり、起きたり、食つたり、飲んだり、風が吹いたり、鳥が啼いたりした事は、成るべく省くか、写すにしても極ざつと写すに止め、此の眼目の要点に注意を集めて、強く、委しく、活き活きと、有り有りと写すがよい。かくして枯木や、喪章や、追懐談や、菜の花が中心に浮き出でて、諒闇の世の空気を立派に現はし出だせば、此の文は締りと生命とのある立派な記事文となるのである。

(傍線引用者)

記事文を書く際の留意点は、この事例に見事にまとめられている。すなわち、「細かく観察すること」「眼目の要点を明確にすること」「関係のない材料はなるべく省くこと」「眼目の要点を強く、委しく、活き活きと描くこと」という4点が浮かび上がってくる。朱書きされた添削内容は、ここでも、「用語の穏当」「意義の明瞭」「照応接続の可否」に重点が置かれている(例えば、運動場の様子を「おだやか」と形容したのを「しづか」に改めている)が、「中心思想と材料」とがうまく適応している良文なので、さほど厳しい批評とはなっていない。「文章の修飾」よりも、「文章の内容」を重んじたのがよく解る。

論説文でも同じことが指摘できる。例えば、雅文でしたためられた論説文の添削事例には、次のような評言が添えられている。「漢文流に一通り整っては居り、又尤もらしい事を云っては居るが、活きた味はひは更に無い。」(巻三第12「水」)とか、「言葉も落ち着かず、穏やかに連絡もせず、余計な文句はありながら、要点は一向立派に書き表はれず、唯だわざとらしい虚飾の文句が並んでいる丈で、真情の殆んど現はれてゐない文である。」(巻三第24「謙遜」)という類である。

一方、感想文風の穏やかな論調で記された口語体の「御雛様と五月人形」(巻四第8)には、次のような評言が記されている。

[評言] 考へ方も面白い。文句も自然で趣味がある。二つの節句に関する徹頭徹尾の対照観には、少しわざとらしく巧み過ぎた趣もあるが、とにかく非常によい作である。漢文家はよく「立意」といふ事を教へる。吾等は「立意」を第一目的として之れに拘泥し過ぎると、文章を拵へ物にする恐れがあると思つて、人に勧めることを好まないが、文章を活かし、面白くするに睨み方、意味の付け方、要点の見出だし方の大切なことは云ふまでもない。此の文章などは最も新らしい、面白い、活きた睨みどころを見出だしたもので、それが骨子となつて、全体を非常に引立てゝ居るのである。

この「立意」とあるのは、現代では「アイデア」とでも言い換えられるものであろうか。五十嵐は、「穏当な言葉」や「文相互の連絡・照応」の守られた「達意の文」によって「人を動かす」ことのできる「内容の真実性」を最も尊重したが、このように、「睨み方、意味の付け方、要点の見出だし方」も文章を活かすには大変重要な役割を果たすものと奨励していたのである。ここに、五十嵐の発想・着想指導の一つの姿を見ることができる。

第5節 五十嵐力に学ぶインベンション指導の方法

以上、『高等女子新作文』の「編集方針」「文題」「文話」「添削・評言」を中心に考察してきた五十嵐力の発想・着想・構想指導の特徴は、次の6点にまとめることができる。

①「書く場」の自覚

「六何の説」に見られるように、文章を書くという行為を実用的・社会的行為として捉え、常に「書く場」を自覚して書くように求めていた。これは、書いたり調べたりする学習に必然性をもたらすものである。その典型は、書翰文と説明文・論説文とを併合させた課題などに見ることができる。

②「観察」と「焦点化」の重視

自己の真実を書くことが文章表現の基本であると捉え、その方法として、「細かに観察」し「細かに書く」ことを推奨した。しかも、その中で「要点を浮かし出す」ことを強く求めていた。これが五十嵐の発想・着想指導において、最も強調したことである。

③「文題」の工夫

日常生活に即した「文題」を課題として与え、「平凡に興味を見出す呼吸」を身につけさせようとした。また、多様な作品例や類題を与えることによって、発想・着想の契機として生かそうとした。

④「虚構の作文」の活用

「擬人物語」のように、ときには「空想の題」で書くことも課して、視点を転じることや、書く立場を明確にすることの重要性を体得させようとした。この方法は、生徒の発想を柔らかくし、新しいアイデアを産み出させるのに、効果的であった。

⑤「添削」及び「評言」による刺激

「思想の明写」（正確でわかりやすい文章を書くこと）や「言表の穩健」（場に応じた適切な言葉）に重点を置いた添削を行うとともに、着眼点の良否に重点をおいた刺激的な評言を添えることによって、書きたいという気持ちを引き出そうとした。

⑥「目分量式」の構想指導

文章展開法については、「目分量式」に、「始め」「中」「終はり」の見通しをつけさえすればよいと強調した。「文章に関する通理」を習得させる必要を認めつつ、「書く内容の発見」を優先させ、その「想」の活きた展開を重んじたのである。